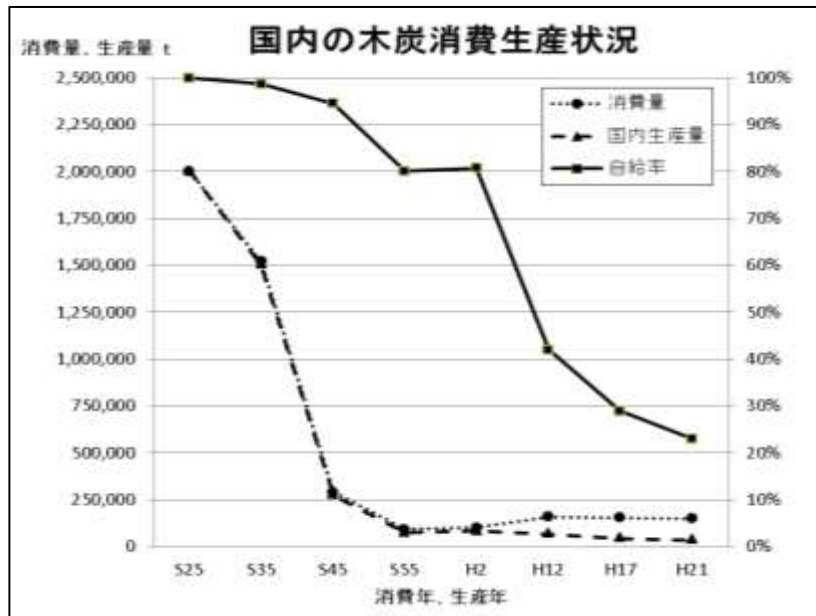


雫石の白炭

会員 丸山 壘 (森林総合監理士)

○ 全国に名を馳せる「岩手木炭」

かつて、木炭が燃料として重視されていた頃、炭焼きは日本各地で盛んに行われていた。日本における木炭生産量は、昭和15年の2,695,163tがピークで、戦争により一旦は大幅に減少するが、昭和30年に戦後のピークとして2,089,300tを記録し、その後は石油やガスへの転換が急速に進み、さらには安い輸入品の影響などもあり生産は減少の一途をたどり、平成27年は10,345tにとどまっている。

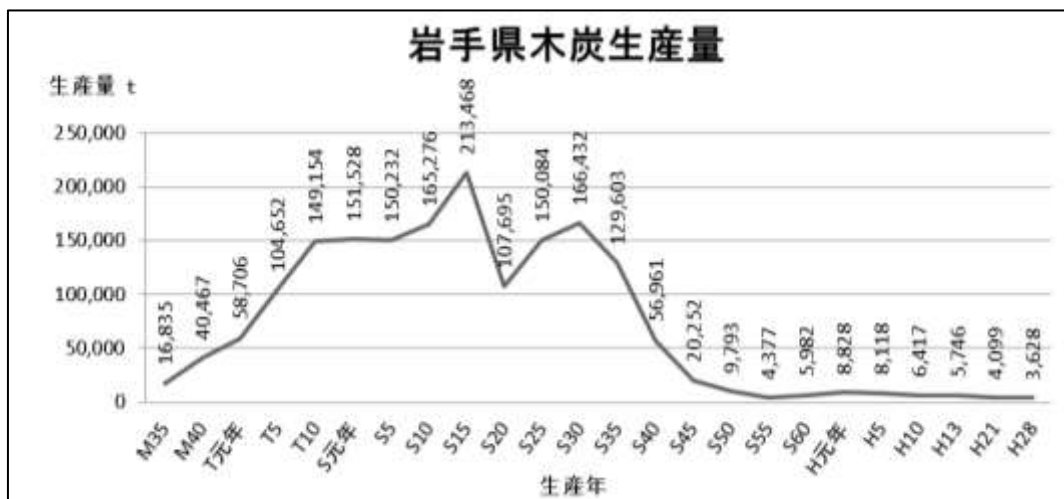


(出典：林野庁業務資料及び貿易統計 ※ヤシ殻炭は除く。)

岩手県において木炭が林産物として商品になったのは明治の中期からと言われ、明治23年の東北本線盛岡までの開通は、それまで局地的交流にとどまっていた岩手県の木炭流通に大きな影響を与えた。

さらに明治38年の日露戦争終結以降の未曾有の好景気による生活用、工業用両方での都市需要に支えられ、木炭生産は増加の一途をたどった。

そして岩手県における木炭生産は、全国と同様に昭和15年に213,468tのピークを記録する。戦後のピークは昭和28年の197,019tで、その後は急速に減少し、平成28年には3,628tとなっている。



(出典：全国燃料協会、岩手県木炭協会)

岩手県は全国一の木炭生産県として昔から名を馳せ、長い間全国シェア1位を維持してきた。

これは県内の需要が多いからではなく、背景として原料の広葉樹資源が豊富なこともあるだろうが、岩手木炭の名を全国に知らしめたのは信頼と品質に他ならず、その礎を築いたのが全国に先駆けて県が実施した木炭移出検査である。

平成27年 国内木炭生産量

順位：産地	生産量（t）
1 岩手県	3,399
2 高知県	1,280
3 北海道	1,256
4 和歌山県	1,176
5 熊本県	481
全国計	10,345

（出典：特用林産基礎資料）

木炭移出検査

大正10年に「岩手県木炭検査規則」が制定され、全国に先駆けて県営検査が実施された。この結果、質量とも全国第一位の名声を博し、農山村民の社会的経済的地位の向上に多大な寄与をする基礎が確立された。

背景として、大正3年、欧州戦乱の影響で鋳工業が勃発発展し、木炭の鋳業用の需要が激増し、価格も日を追って高騰。この結果、粗製濫造となり、種類、量目、包装もまちまちとなり、未炭化のものや粉炭が混入するなど消費市場の不評を買っていたため。

県は、製炭技術を改善向上し、原木資源の節約と薪炭林の保続を図り、木炭の品質改善と規格の統一、不良品の撲滅を期し、消費市場の声価を向上させるため、県営検査を実施した。

木炭移出検査は、生産現場から遠く離れた移出地の駅頭、岸壁で行う検査で、不良木炭絶滅と俵装調整などに大いに貢献した。

しかし、この検査により製炭者が正確に知ることができるのは消費者の評価ではなく、業者に渡した木炭の俵数だけだった。

このため、岩手木炭の名声を維持するには生産改良を図ることが重要との認識から、のちに岩手県は各地に木炭指導検査出張所を設け、移出検査とともに木炭生産検査による生産指導体制を整備することとなった。



S34年木炭検査（出典：岩手県林業史）

木炭生産検査

岩手県は昭和10年に岩手県林産物検査規則を制定し、製材の移出検査を含めて県下8箇所の支所と83箇所の出張所を設け一斉強制検査を実施する方針を取った。

この検査は生産現場である窯元で製炭者自身の申請によって実施される検査だった。

検査員の口から1等何俵、2等何俵、不合格何俵と伝えられ、不合格の理由や改善のための指導も受けることができた。そのため製炭者の労働意欲は大いに高まり、この木炭生産検査の確立は、戦前戦後を通じた木炭最盛期における岩手木炭の声価の高揚に大きな役割を果たし、日本一の木炭王国を築くこととなった。

○ 雫石の白炭

雫石にもかつては多くの製炭者がいた。

製炭が盛んになったきっかけの一つに明治 38 年の冷害がある。

この冷害は東北地方一帯に影響し、特に岩手県の農村は激甚を極めた。

県は救済策として、農家の副業であった製炭の改良のため、明治 39 年に広島県より檜崎圭三を講師に招き、紫波郡山王海で炭窯 3 基により白炭黒炭両種の講習会を実施し、国有林では原木の特売（払下げ）を行った。

この講習会には御明神村から新里長之助、新里専蔵が参加し、御明神村では同年から急激に生産量が増加し、そのほぼ全量が白炭だった。

橋場駅と木炭

橋場地区は農地が少なく藩境の宿場として生計を立ててきたが、東北本線や奥羽本線の開通に伴って、仙岩峠の交通が減少したことにより多くの人が炭焼に転業したとされているが、大正 11 年橋場軽便線（現 JR 田沢湖線）の雫石駅－橋場駅間開通に伴い、多くの木炭が橋場、雫石の両駅から移出されることとなった。

旧橋場駅に近い史談会会員の三上氏によれば、橋場駅跡の 2 本のホームのうち、一番奥の線路は木炭の積み込みに使われていたようで、駅の構造が旅客密度に比べて立派なのは、木炭移出基地としての使命が影響していたのかもしれない。



旧橋場駅 1 番ホームにて。右が 2 番ホーム
(H24 少年少女歴史教室 筆者撮影)

西山村は、葛根田川上流にナラ、ブナなどの豊富な資源を有し、早くから製炭が普及したと考えられ、葛根田川の上流や網張方面まで分け入り炭焼きをしていた。

車も道路も未発達な時代は、製炭者が山深くまで分け入り、その場で築窯し炭焼きをした方が、人力で運搬することを考えればはるかに効率が良いからだ。

御明神村と同様に、明治 38 年国有林払下げが実施されるとともに冬期の副業として製炭に従事する家も増加し、五区篠崎、上西根方面ではほとんどの家庭で製炭に従事した。

すべて白炭で、毎日生産されるので、現金収入の多くなった農家の各家庭が生活にゆとりができるようになった。

また、国有林でも、滝ノ上や青倉地区で製炭事業を行い、事業所や機関車の燃料用、軍事用として森林鉄道葛根田線を使い輸送した。

岩手県木炭協会支部別木炭生産量

(単位：kg)

支部	S27	S30	S35	S40	S45
雫石※	2,089,965	1,936,410	1,322,610	452,511	289,016
御所	2,467,155	2,566,425	1,360,875	682,845	165,488
御明神	2,325,330	1,974,570	1,233,015	435,000	159,638

※西山は雫石に含まれ、その大部分を占めるものと思われる。(出典：岩手県木炭協会)

昭和 10 年に始まった木炭生産検査は生産現場である窯元で実施される検査だったが、窯元まで出向いての検査では検査効率が悪いため、沢の入口や集落の一定箇所に集荷された木炭について検査が行われるようになり、そのために木炭倉庫が建てられた。

山奥で焼いた炭は 15kg を 1 俵として 3 俵ぐらいは背負って麓にある木炭倉庫まで運んだ。

木炭倉庫では集めた木炭を各家庭用に分別し、近所の家庭が取りに来て利用した。

木炭検査は品質や規格など県のお墨付きを受けるもので、仲買人が木炭倉庫で検査を受け、生産者は仲買人から検査証(札)を購入する。仲買人は移出業者に販売し、そこが県外に販売する。

当時、雫石では、農協が各地から白炭を買い集め、雫石駅で貨車積みしていた。貨車積みされた白炭は、工業用に適するため釜石へ運ばれた。

雫石は現在でも白炭のみ生産しており、県内最大の産地として 10 人の製炭者がいる。

自動車や道路が発達し、伐採木の搬出が容易になったことから、窯は山奥ではなく麓に立地するようになった。

製炭者は四六時中、窯に張り付いているわけではなく、材の立て込み、温度調節、窯出し以外は窯を離れることができる。

その間、伐採や薪割りなど忙しく働くこともあるし、窯でラジオを聴いたりテレビを見たりして過ごすこともある。



雫石駅で貨車積み待つ木炭
(出典：岩手県木炭協会 50 年のあゆみ)

平成 27 年 県内白炭生産量

順位：産地	生産量(kg)
1：雫石町	55,065
2：花巻市	9,300
3：盛岡市	90
県内計	64,455

(出典：岩手県木炭協会)

白炭と黒炭の違い

白炭と黒炭は窯の構造と焼き方の違いであり、原料となる樹種の違いはない。

	白炭	黒炭
窯の構造	石窯	土窯
精煉温度	1000℃	700～800℃
製炭時間※	50～150 時間	200 時間
消火方法	窯外へかき出し消粉をかけて消火	窯を密閉し消火
発熱量	6,950cal/g (コナラ)	6,850 cal/g (コナラ)
特徴	火持ちが良い。樹脂成分がほとんど残留していないためほぼ無臭。	火つきが良い。上質な黒炭でもある程度臭気がある。白炭に比べ安価
参考価格	1,700 円/2kg (ウバメガシ(バラ))	1,700 円/6kg (ナラ切炭)

※窯の大きさにより違いがある。

白炭窯は石窯が一般的で、雫石では白炭窯に適した石が葛根田方面で採れると言われている。

胴(壁)は川の石、鉢(天井)は山の石を使って窯を作る。

材の立て込みは窯の中には入らずに外から棒を使って行う。

窯出しは炭が冷めるのを待たずに、外に棒でかき出して消し粉(土と灰を混ぜ水を含ませたもの)をかけて消す。

1 日で完成させる日窯が可能だが、冬は 1 日、夏は 2,3 日で 1 回転させる。

炭は一年中焼くが、冬の間は伐採できないので、秋のうちに春までの原木を伐っておく。



木炭を運ぶ雫石の森林鉄道（出典：高橋健二氏アルバム）



西山の現役白炭窯（筆者撮影）

○ 白炭の将来

製炭者は高齢化とともに減少し、過疎化の流れは白炭(木炭) そのものを歴史の中に葬りさろうとしているかのようにも思える。

かつて生活必需品だった木炭は、日常使うことはなくなり、消費量が大幅に減少した。

アウトドアでの需要は、脇役に品質を求めない消費者により、安価な輸入木炭が選択された。

そのため、元々流通量の少ない白炭は、木炭を扱う者の中でさえ存在感を失い、本来、黒炭より高値で取引されるべきものが同等に扱われ、それが製炭者の間での白炭離れにも影響しているともいわれる。

白炭(木炭)の火を絶やさないために何が必要なのか。それは、価値を認めてもらうことと、価値を正しく評価してもらうことの2点に絞られる。

価値を認めてもらうのは、白炭の品質だけではない。白炭(木炭)の生産は、森林(広葉樹林)を適切に管理し、豊かな自然を引き継いでいくうえで重要な役割を果たすということ認識すべきで、この点については、今、ナラ枯れ病という一つの現象を通じて注目され始めている。

一方、価値を正しく評価してもらうことは容易ではない。白炭(木炭)生産の構造的特徴に関することで、かつて農閑期の兼業による生産が多かったことや、天然林や自らの所有林で原木を調達するため、生産コストが必要以上割安に抑えられてきた背景がある。

生産形態が専業に変わり、原木を仕入れなければならない今の時代にあった価格で評価されなければ、後継者など到底望めないだろう。

戦前から戦後間もなくにかけて、東京など都市部における木炭消費人口(言い換えれば木炭を作らない人)の増加や鉱工業の発展に伴う工業用木炭の需要増大に支えられ、白炭(木炭)産業は、山村経済の一翼を担うと共に、冷害時における農家の救済措置としても重要な存在だった。しかし、石油・ガスなど化石燃料へのエネルギー転換が急速に進むと共に需要は激減し、さらに経済成長による都市部の旺盛な雇用市場が、作り手の白炭(木炭)離れを容易にした。

そのような中、雫石は岩手県における白炭の独壇場として奇跡的に生き続けている。それを過去の歴史としないためには、まず私たちが意識することが大切だと考える。

【参考資料】

岩手木炭(畠山剛)、岩手県木炭協会40年、50年のあゆみ(岩手県木炭協会)、雫石町史、岩手県木炭関係資料(岩手県木炭協会)、林業実務必携、林業技術ハンドブック